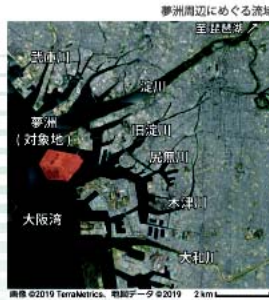


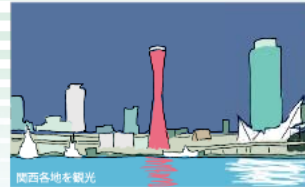
水 水がめぐる

大地の水は、山、川、海へと流れ、水蒸気から雨となって、再び大地に戻っていく。そのような循環で地球環境が成り立ち、私たちの生活を支えている。
 夢洲の地は、淀川、武庫川、大和川に代表される河川の水が流れ込む大阪湾に位置しており、関西の水循環の要となる場所と言える。
 会場内外で水の流れが感じられる場所になるよう、外部の水とつながる港や、内部の水を感じることができる水辺のエリアを設ける。



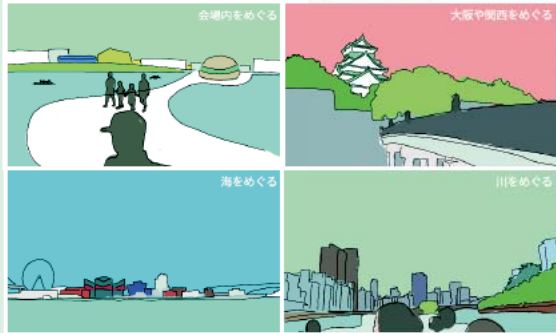
関西をめぐる

万博会場は、大阪湾に面しており、海の向こうには淡路島、周囲には六甲山系や生駒山系、金剛山や和泉山地、その間には関西の都市部が広がっている。また、大阪湾へと注ぐ淀川は京都や滋賀ともつながっている。関西とのつながりを体感し、観光してもらうため、「川」、「海」で各地をつなぐ船着き場を設ける。



景色をめぐる

万博会場内でのパビリオンや水辺、港、生き物が住む自然の地を人々が回り、それぞれの景色を楽しむ。また、周囲の大阪をはじめとする関西の地に訪れて、それぞれの視点で多様な景色を楽しむ。
 夢洲を起点に色々な景色に出会えるような場所づくりを行う。



るめぐる

2025 大阪・関西万博の開催地である夢洲。淀川水系をはじめとする河川から、関西の大地をめぐった水が流れ着いた先、大阪湾にある人工島。その人工島を形作るのには、建設残土や廃棄物。そのようないわばゴミの山にも、季節がめぐり時代が流れて今では植物が芽吹き、渡り鳥がやってきて、命がつながりめぐっている…。そんな夢洲で開催される万博にもたくさんの人や技術が集まる。人や技術が夢洲に流れ着いてここからめぐる、流れるめぐる。

いのちがめぐる

夢洲は生物多様性のホットスポットである。水鳥をはじめとする多種多様な生き物が生息し、相互に関わり合うことで、地域性の高い現在の生態系が維持されている。万博会期後はパビリオンなど各種の建築物は撤去する方針であることを踏まえ、自然への影響を最小限に抑え、生き物の保全、自然との共生を目指す会場デザインとする。
 また、フレキシブルな自然空間・農空間を設け、新たないのちが存在できる環境をつくる。



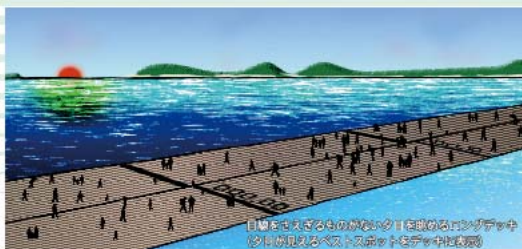
資源がめぐる

夢洲は建設残土や廃棄物などを資源としてできた島である。本来はゴミとなるものを利用し、未来を創造し、生産する場所となり、出会いの場とすることができる。万博で使用したパビリオンなどの資源は、会期後も再利用ができる柔軟性のあるものとし、資源の循環を促す。



季節がめぐる

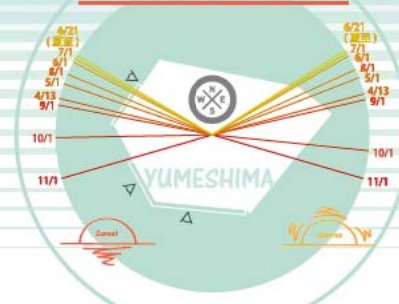
夢洲は大都市の大阪市にありながら、海に囲まれた島である。そのため、空が広く、朝日や夕日の方角の変化で季節の移りを感じることができる。会場内においても四季の移りを感じられる広場や景観を配置し、渡り鳥などによっても季節に思いを馳せることができる自然を体感できる場所とする。



季節ごとに見られる鳥



2025 日の出、日の入り位置マップ



時代がめぐる

万博は新たな技術を提示する場所である。その場所で日本の伝統的な技術である草履根などを随所で用いることで、伝統・歴史を感じ、技術の継承に寄与する会場となることをめざす。



エントランス広場などでのかぶき草履根の活用

水でつながる

水 時代 関西 景色

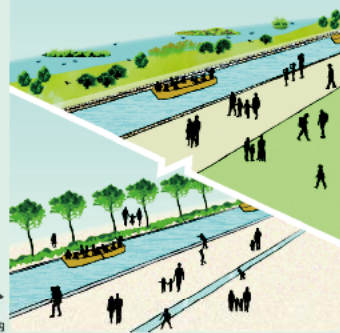


万博会期中は広大な敷地内での移動の利便性・快適性向上や周辺の渋滞対策の必要がある。夢洲はトンネルや橋といった陸路とつながる島であるが、電車やバス等以外にも、海や川から船によって移動できるよう、川からと海からの2種類のアクセスのための港を整備する。移動手段となる船は、ただアクセス方法となる以外にも、ゆっくりと景色を楽しんでもらいながら移動することができるため、観光やアクティビティとしても活用できる。

また、夢洲周辺からの水の流れを視覚化し、水の美しさや存在に意識を向けることができるよう、万博会場中に河川や水路をめぐらせる。広く、移動時間がかかる会場内であっても、アクティビティとして船やカヌーを用いることで、楽しみつつ移動時間の短縮を図ることができる。



▲港デッキのイメージ



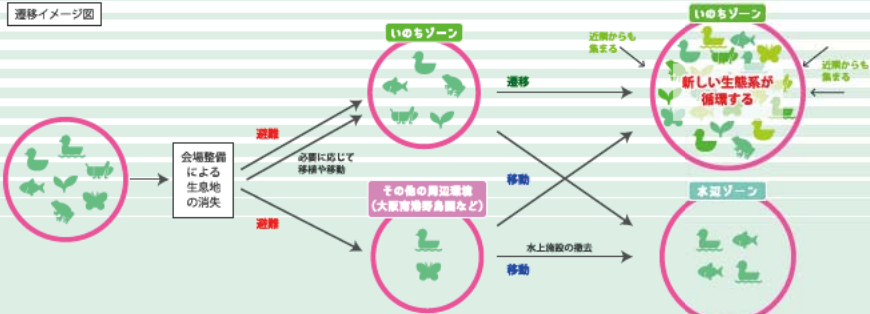
会場内の水路イメージ
上：いのちゾーン内
下：パビリオンゾーン内

命がつながる

いのち 水 季節

夢洲では埋め立てと環境の遷移がゆっくりと時間をかけて繰り返されることで、固有の生態系が成り立ち、水辺には希少種を含んだ多くの生き物が集まっている。人工島としての環境を最大限に維持するため、いのちゾーンを設け、会期中の生き物の避難場所となる水辺のピオトープを形成する。球形や円盤状の特色ある小規模な浮き島を多用し、多くの生物を呼び込める多様な環境を創出する。会期後の開発に備え、水上に浮かぶ移動式のピオトープとする。

遷移イメージ図



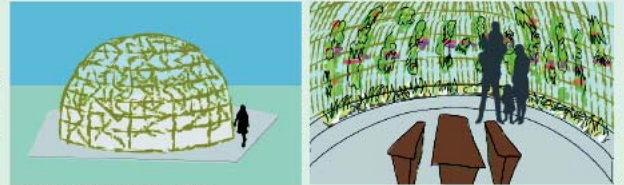
移動可能な浮島式の生育空間
遺伝子レベルでの多様性を考慮し、植栽には主に地域由来の植物を使用。また、地盤の崩壊物層に影響を与えないよう、土壌固結は行わず、置き型の水辺を設置し、高水植栽は行わない。

現在 → 会期中 → 会期後

農業でつながる

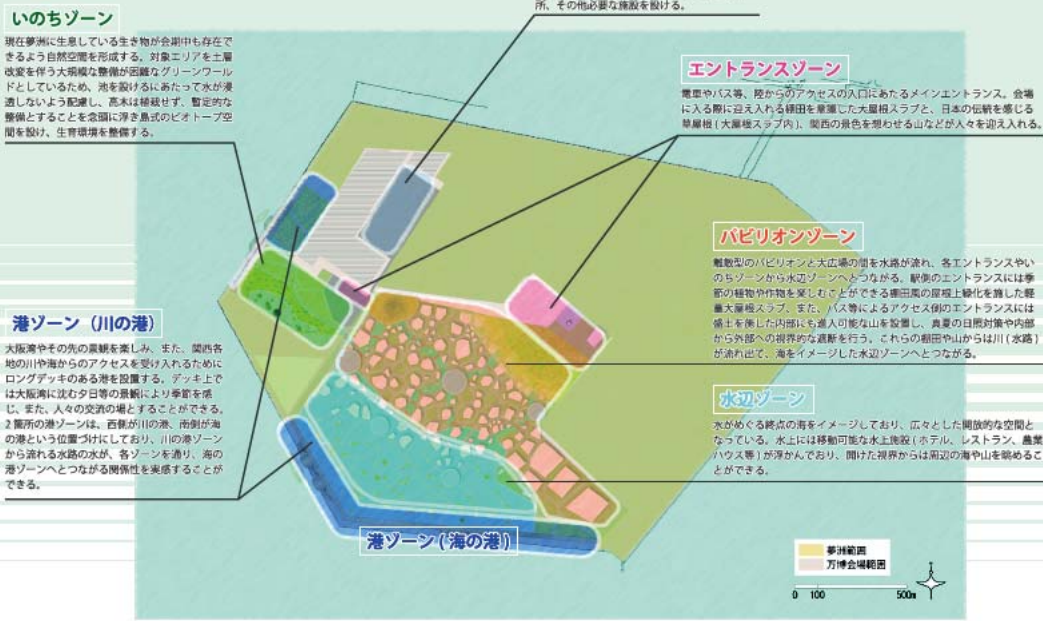
いのち 季節 資源

私たちのいのちをつなぐ「食」と「農」。農業は作物という新しいいのちを生産して、いのちの循環をつなぐプロセスであり、生産と消費の循環、季節ごとの旬の移り変わり、多くの「めぐる」要素が含まれる。持続可能な農業の実現に向けたステップとして、農業が日常に当たり前に存在する身近なものとなるよう会場の中に風景として組み込む。また、ライフスタイルが多様化する現代において、場所にとらわれない自由度の高い農生産が実現できれば、個人単位での自給自足や健康的な食生活につながっていく。通路、水上に浮かぶ休憩スペースやレストランの中、パビリオンゾーンの広場を覆う大屋根の上…様々な空間に新しい農空間を創出する。



水上ハウス(左)と水上レストラン(右)
骨組みには竹を使用し、荒廃する竹林の利用促進につなげたハウス。水耕栽培技術を活用し、小さな空間で多様な作物を栽培する。

ゾーニング図



待ち時間対策

人気のあるパビリオン、イベント、店舗には人が集まり、行列ができる。人気の指標でもある行列は嬉しい一面もあるが、その待ち時間は苦痛にもなる。

待ち時間をなくす、あるいは待ち時間を楽しむために、メガネ型のようなウェアラブル端末を利用したARアプリを活用する。万博会場と連動し、会場内を巡ることで進めていくARアプリによるゲームの進行により、優先入場等の特典を得られるような仕組みを導入する。そのほか、行列が予想される施設においては農作物トンネルを併設し、待ち時間を使って散水や雑草抜きなどの簡易な管理作業に参加できるようにし、一定条件をクリアした人だけが果実等の収穫体験ができる仕組みを取り入れる。そういった取り組みにより、会場内の混雑や待機時間を緩和させることができる。



ARアプリのイメージ

農作物トンネル

立地環境特性に関する配慮

夢洲は、建設残土や廃棄物による埋立によって造られた人工島であり、万博会期後には本格的なまちづくりが予定されているものの、詳細な計画は未だ決まっていない状況にある。また、大阪万博の開催に当たり、「SDGs(持続可能な開発目標)」への言及があるため、環境への負荷や、資源の有効活用にも向き合わなければならない。そのような物理的にも、社会的にも特殊な環境下にあるため、会場整備にあたっては、それらの特性に配慮する必要がある。

会場全体において、可動式プランターを利用した植栽計画により、海辺という強風が予想される環境下での台風時の倒木対策とともに、会期後の資源の有効利用が可能とする。

水辺ゾーンにおいては、ホテルや農業ハウスなどの水上施設を使用することで、フレキシブルな整備と会期後の資源の有効利用が可能である。

いのちゾーンにおいては、生き物ユニット(水上施設に生物の生育環境を整備したものを)を使用することで、掘削を伴わない整備が可能であり、会期後は生き物の生育環境を保ったまま、別の場所への移動も可能である。

